



# もふもふと異世界で スローライフを目指します! 1

α L P H α L I G H T

カナデ  
*Kanade*

# 目次

プロローグ 7

第一章 落ちた世界 12

第二章 初めての街 101

第三章 王都への道 196

第四章 王都レースーン 260

## ガリード

パーティ『深緑の剣』のリーダー。  
豪快で陽気。

## ノウロ

パーティ『深緑の剣』の偵察係。豹の獣人。

## スノーティア

アリの従魔となったフェンリル。  
もふもふの毛並みは最高。

## オースト

『死の森』で隠居しているエルフ。  
アリを助け、弓や薬作りも教えている。

## アディーロ

アリの従魔となった美しい鳥。  
風を操るのが得意。

## アリト

日本から異世界アーレンティアに落ちた『落ち人』で、本作の主人公。  
オーストに助けられ、『死の森』で暮らし始める。

## リナリティアーナ

パーティ『深緑の剣』に属するエルフ。薬師でもある。

## ミアナ

パーティ『深緑の剣』の一員で、魔法が得意。

CHARACTERS

登場人物

Motomofu to Isekai de Slowlife wo Mezashi masu!

Presented by KANADE

## プロローグ

『・・・\~@|¥?+…\*?/?|¥!…:变换…:開始』

『……………終了。不適性。順応点まで変換開始』

『……成功。適性確認。過程終了を確認』

痛い痛い痛いっ!!

何なんだ、これはっ! 痛いイタイ、これ以上は死んでしまっつて!

目も開けられず意識も朦朧とする中、襲い来る強烈な感覚に神経が悲鳴を上げている。

まるで、手足をもがれているかのような激しい痛み。

頭には無機質な言葉が直接響いているが、その意味を理解する余裕などなかった。

なぜ俺がこんな痛みを味わっているのか! どうしてこんなに苦しまなければならぬ

んだ! ふざけるなっ!!

強く拒絶すると同時に、バリッとかか破れる音が聞こえる。

「……境界点突破。身体形成確認」  
その声を最後に、残っていた意識さえも真つ白に塗り潰された。



その日、俺——日比野有仁は、いつもの通り会社帰りに本屋に向かって歩いていて、小説の新作を早く読みたいから、夕飯は作らずにコンビニで買って帰ればいいのか。あー、金曜だし、一緒にビールも買おう。

俺はそう内心で呟きつつ、夕飯は何を食べようかと考えていた。

「うわ、あれ危ないか？」

ふいに近くで聞こえた声に顔を上げると、工事中の高層ビルの上に吊り上げられた鉄骨がぐらぐらと揺れているのが見えた。

うわ、本当だ危ないな。もう暗くなっているのに、なんでビル工事なんてやっているんだ？ 工期が厳しいとか？ ……どこも大変だよなー、こう景気が悪いと。

せっかくの金曜の夜だというのに、つられて自分の仕事に思いを馳せてしまいたいようになり、慌てて首を振って頭を切り替える。

「鉄骨が落下でもしたら危ないな。速回りして行こうぜ」

「そうだな。あれ、落下注意とか立て札でも立てておくべきだよな」

落下注意かー。確かにあんなのが落ちたら即死だろう。

揺れる鉄骨を見上げ、俺もあの付近は避けようと考えて左に曲がろうと一步踏み出すと……。

「うわっ!？」

あるはずの地面を踏めずにバランスを崩して前のめりになり、転ぶ!? と思った瞬間、俺は転がるようにどこかへ落ちていった。

このままだと落ちてくるのかと思つた直後、視界が白に転じ、呼吸が苦しくなった。それと同時に全身をすさまじい痛みが襲つたのだ。

一体、何が起きているというのか？

その間、走馬燈のように過去の光景が頭をよぎつたが、特に思うことはなかった。物心ついた時に両親は離婚しており、俺を引き取って面倒を見てくれた祖父も、就職した頃に相次いで亡くなっている。

親友と呼べるような友人もおらず、たまの休みに飲む知り合いが数人いるくらいだ。

だから、もしここで人生が終わっても遺すものなど俺にはない。……ないように生きていた。

けれど。

俺はただ自分の食べる分だけ働いて、好きに生きていければ良かったのに。  
 これで俺は死ぬのだろうか……。  
 意識を失う間際、そう考えていたのだった。



ペロペロ。ペロペロペロ。

さわさわさわもふもふ。もふもふもふもふ。

んん？ なんだか頬にぬめつとした温かな感触が……。それに、腕には心地好いもふもふ？

なんだこれは？ 一体どうなつて？

ほんやりとした頭では状況を理解できなかったが、その感触は止まることなく……。

「ん……。んん？」

「ウォンツ！」

俺の呻き声に反応したのか、もふもふとした毛が、俺の足の上を右往左往している気がする。

これ……。犬の尻尾か何かだろうか？

「おお、目が覚めたかのお？ お前さんは運がいいのお。この子が見つけなければ助からなかったぞ。怪我もなく無事な『落ち人』なんて実に珍しいわい」

顔中を舐められる感触と、その洪めの声を聞いて、意識がハッキリと覚醒した。

「ちよっ、こら！ 舐めるなつて。もう起きたから止めてくれ！ でも、いい毛並みのもふもふだな……。……つて！ はあっ!? なんだこれっ！」

ゆつくりと重い瞼を開けると、目の前いっぱい犬の顔があった。

白銀に輝く毛並みにつぶらな緑の瞳。犬というより、狼のほうが近いか？ 普通の大型

犬よりも一回り大きいだろうか。

もふもふの狼は、俺が起き上がると、すぐ隣でこちらに体重を預けて座った。

思わず手を伸ばして、もふもふを撫でまわす。俺に寄り添ったその子の毛並みと温もりが、俺の動揺する心を落ち着かせてくれた。

目覚めた時に見えたのは、隣のもふもふの子の顔と、頭上を埋め尽くす美しい木々。そしてその隙間から見えた青空と……。二つの太陽？

……。ここは、一体どこなんだ？

## 第一章 落ちた世界

### 第一話 落ちた先は異世界

どうやらここは、アーレンティアと呼ばれる異世界らしい……。

目覚めた森の中でその現実を受け入れるまで、だいぶ時間を要した。

今の状況を説明してくれたのは、俺を助けてくれた洪めの声の主だ。オーストと名乗ったその人は、外見は五十過ぎの初老の男性だった。ただ、外見よりも老成した雰囲気だから、俺は爺さんと呼んでいる。

オースト爺さんは混乱する俺をなだめ、近くの切り株に座り、この世界のことを語ってくれた。

この世界には俺と同じように落ちて来る人がいて、『落ち人』と言われているそうだ。

『落ち人』が見つかる場所は全て、辺境の魔境となっている土地らしい。ちなみにここは

『死の森』と呼ばれており、ほぼ強力な魔物や魔獣しかいないことから、一度入ったら生きては出られないとされているとのこと。

それを聞いた時、今、自分が生きているのは奇跡みたいなものだと思った。もし爺さんに助けてもらえなければ、今頃、魔物の腹の中だったかもしれない。

それでも、ここはラノベでよくあるファンタジー世界なのか！ と密かに興奮して、魔法もあるのか確認してみると、その答えは「ある」だった。

「魔法って、火や水などの属性があって、呪文を唱えて使うやつか？ ファイアーボールとか」

「ほほう。そちらの世界の魔法はそう使うのじゃな。この世界では、発現する魔法を属性で区別はせんし、呪文などもないぞ。それに決まった魔法もほとんどないな。使う人それぞれじゃ」

「は？ でも、魔法って火を出したり、水を出したりして、攻撃に使ったりもするよな」

「ああ、そうだな。僕の家でゆっくり説明した方が良いのじゃが、すぐに知りたいだろうから、今ここでこの世界と魔力、魔法の関係を簡単に説明しようかの」

俺が首を捻っていると、もふもふの子が尻尾を振りながら身体をすり寄せ、俺の膝に頭を載せた。その頭を躊躇うことなく撫でる。頭の毛も非常に手触りがいい。

「よし。ではこのアーレンティアのことを、わかりやすく説明しようかの。まずはこの世

界の大前提としてはじゃな。世界には魔素まそがあり、あらゆる物が魔素から変換された魔力を有している、ということじゃ」

「へ？ 植物や動物、地面にも魔力が含まれている、ということか？」

「そうじゃよ。この地面も木々も水も人も獣けものも、全てが魔素から変換された魔力を持っているんじゃ」

うーん、それじゃあ空气中に魔素が漂たなっているってことか？ ってことは、今も俺は呼吸しながら、魔素を取り込んでるわけで……。

「だから魔法というのはじゃな。空气中にある魔素を使い、自分の魔力を媒介ばいはいして己の望む現象を発現させることなのじゃ」

「……じゃあ、火をつけたければ、空气中の魔素を自分の魔力で火に変化させ、魔法として発現させるのか？ だとすると、魔法を使うにはイメージが大事とか？」

「そうじゃ。魔法とは、自分が想像した現象を発現させることじゃから、その発現した現象は使う人それぞれなのじゃよ。お前さん、凄まじいの。今の説明でそこまで理解できるのかいや、お前さんの世界にも似たようなものがあるのかの？」

「いや、俺の世界には魔法自体がなかったし……ん？」

何なに気なく言った自分の言葉が引つかかった。

「俺は魔力なんて持ってないから、もしかして俺、魔法を使えない……？？」

「いいや、ここにいるのじゃから、お前さんもすでに僕と同じくこの世界の人間じゃよ。

すなわち、別世界から落ちて来た時に、この世界に合うように変化しているはずじゃ」

あー……変化している、か。

最初は動転して、何がなんだかわからなかった。けれど、もふもふの狼を撫でている手が見慣れた手よりも大分小さくなっていることには気づいていたのだ。

ただ、それをすぐ確認するだけの精神的な余裕がなかっただけで。

「……やっぱり現実を見ないとダメだったことか。爺さん、俺は元の世界では二十八歳だ。つまりとうに成人した、いい大人だったんだが」

ふう、と思わず出たため息が重い。

「お前さん……さすがに、そこは今の現実と向き合わねばなるまいよ。どれ、僕が魔法を使つてやろう。今の姿を確認するといー」

まだその事実と向き合う覚悟ができていないから、遠慮えんりょしたいところなのだが。

そう思いながらも、魔法を使い始めたオースト爺さんを見つめる。

爺さんがぼんやり光り出すと、周囲の空気が……変わった？

空気中の何かが爺さんの周りで動いている——そう感じられるのは、俺が今、魔力を持つているからなのだろう。

人生初めての魔法をまじと見つめていたら、そのまま現実と向き合うことになった。



「ほれ。これなら姿が映るじゃろう。どうだ？ 見えるかの？」

「な、なん、なんだこりゃあー！っ！」

そう、爺さんが魔法で作ったのは、空中に浮かんで光を反射する鏡のようなものだった。それに映し出されていた自分の姿を見て……。ふっと意識が遠のいたのがわかった。



俺が意識を取り戻したのは、しばらく経ってからのこと。

爺さんの魔法で見たのは、青みがかった暗い輝きの銀髪に、深い緑色の瞳の、推定十二、三歳くらいの少年だった。

見た瞬間は、あまりの違いに自分だとわからなかった。

でも、一緒に映った俺の膝の上にもふもふの狼を見て、少年は自分なのだと確信したのだ。

落ち着いてじっくり見てみると、顔立ちは確かに俺だ。中学の頃はこんな顔をしていた。髪や瞳が元の世界ではありえない色だから、顔の印象が違って見えたのだろう。イケメンとはいえない、取り立てて特徴のない顔なのは間違いないのだが。

「なんで髪や目の色が変わって、幼くなっているんだ？ これが、この世界に来たことに

よる変化なのか？ 全然自分だっという実感が無いんだが……」

爺さんに「ここは異世界だ」と言われた時よりも、自分の姿の方が現実味が無い。

「でも、この感触を味わっているのだから、やっぱり現実なんだよな……」

自分の顔を確認している時も、膝の上にあるもふもふの狼の頭を撫で続けていた。耳の短めな毛や、柔らかなふにふにした感触が、とても気持ちいい。

「儂が見つけた時には、すでにお前さんはその姿じゃったぞ。恐らく、お前さんが魔力のない世界から来たことで、外見にも変化が出たのじゃろう」

その時、ふと思いついた。あの苦痛の中で、耳の奥に響いていた無機質な声を。

変換とか何とか言っていたような……。もしかしてあれは、この世界へ適合するために変化した際の痛みだったのか？

「第一お前さんは、最初から儂の言葉がわかったであろう？ 今話しているのは、お前さんの世界の言葉かな？」

「え？ ああっ！ そういえば……」

確かに、爺さんと普通に会話できているな。今、声変わり前のちよつと高めの声で話しているのは……。

「日本語、じゃないな。それなのに自然に話せるし、意味もわかる。でもこんな言葉は、俺は知らない……。一体どうなっているんだ？」

俺の口から出ているのは、音だけ聞けば知らない外国語だった。そのことに気づくと凄<sup>おそろ</sup>い違和感<sup>わがた</sup>に襲<sup>おそ</sup>われ、驚<sup>おどろ</sup>いて日本語を話そうとしたら、口から出たのはこの世界の言葉だった。

「ほっほっほっ。今頃気づいたんじゃない。多分文字も普通に読めるし書けるだろうて」  
「そ、そうなのか？ まあ、確かに言葉も文字もわからず不便な思いをするよりはいいが……」

とはいえ、すんなり呑み込むことなどできない。なぜ日本語を発音することさえ不可能なんだ？

「儂<sup>おれ</sup>がさっき、お前さんはこの世界に合うように変化していると言ったじゃろ。その変化は、お前さんの全ての事柄<sup>ことごと</sup>に及<sup>およ</sup>んでおるのじゃろう」

まあ、確かにそういうことなら、納得できなくもない。

元々、普通に日本語を読み書きできていたので、この世界の言葉でそれができるといっわけか。

「儂<sup>おれ</sup>の推論<sup>すいろん</sup>だが、身体的に同じ年齢にならなかったのは、小さくしないとこの世界に適合<sup>あてあ</sup>できなかったからじゃろう」

互いの世界の身体能力の違いが原因で、年齢が半分以下の身体になったということだな。でもそれなら、髪や目の色まで変わった理由は？

「もしかして、この世界には黒髪黒目の人っていないのか？」

「いや、いるぞ。ただほとんどおらん。髪や目の色は、好かれている魔素の色に染まるのじゃ。だから後から色が変わる、なんてことも稀<sup>まれ</sup>にある。ほぼ生まれながらの相性<sup>あいしょう</sup>のようなものだがの。黒は闇の魔素の色じゃ。しかし、他の属性に好かれていれば別の色が混ざる。つまり、黒髪黒目なんて、よっぽど闇に好かれていて、他の属性を受けつけないということなのじゃよ」

魔素の色？ ……じゃあもしかして魔素は、水素や炭素といった元素のようなものなのか？ 水素っぽい魔素は水の属性、とか。

「人には属性の適性がある、ってことだな。黒髪黒目だと闇属性しか使えないのか？」

「いや、誰もがどんな魔法でも使うことはできる。ただ、魔素にも特性があつての。火属性の魔素は火を熾<sup>おこ</sup>しやすい。水属性の魔素は水を出しやすい。そんな感じじゃ。その属性の魔素に好かれると、魔素を変化させやすくなり、魔法の発現が早くなるんじゃない」

魔素に好かれるって……まさか、意思があるわけじゃないよな。

まあ、よくわからないが、異世界のことを地球基準<sup>ききん</sup>で考えようとしても仕方ないし、そんなもんだと思っておくことにしよう。

「お前さんの髪の色は青系が強いから、恐らく水と相性がいいじゃろう。それと瞳が緑じゃから、風じゃな。魔法を使う時には色々試<sup>あ</sup>してみるといい」

水系？ 俺、別に水泳とか得意でもないんだが。水田の手入れを、子供の頃から手伝っていたからか？

「とりあえず、この世界に慣れるまでは俺の家にいるといい。その後のことは、おいおい考えればいいじゃろう。身体は変化して適応したとしても、ここでの暮らしは色々と学ばねばならないからの。そうじゃな、宿代の代わりに、お前さんのいた世界のことを話してもらえたらそれでいい。家にはその子みたいな従魔じゅうまがたくさんいての。じゃから、この森の中でも俺の家は安全じゃ。他に住む人もいないのでな」

「おおっ！ 爺さんの家には、もふもふがいつぱいいるのか！ ぜひよろしくお願ひします！ お世話になりますっ！」

もふもふがいつぱいだなんて、天国じゃないか！

もちろん、日本にいた頃の話くらいなら、いくらでもできる。

「ふう。現金なヤツだ。まあ絶望ぞぼうされるよりはいいか。ここの暮らしに慣れたら、次は魔法の習得じゃな。自分の中の魔力を認識して、意識して操あやつることから始めんといかん。のんびりやるしかないがの」

「魔力の扱あつかいなんて初めてだから、時間はかかりそうだよな……。俺の年の頃には、魔法をそれなりに使えるのが普通なのか？」

「そうじゃな。毎日使う簡単な魔法なら、五、六歳くらいになれば、使いこなせる」

うーん。身体は小さくなってしまったが、今の俺にどのくらいの能力があるのか知りた  
いよな。

こう、もつと自分の状態がわかる方法はないのかな？ ゲームでよくあるステータス  
みたい、数値化された能力が見られるとか。

見てみたいよな、ステータス。どうせ異世界なんて非現実的などころにいるのだし……  
とりあえず試しに言ってみるか？

「よし。出ろ、ステータスッ！！」

力りきんでゲームのステータス画面をイメージしながら叫んだ瞬間、身体の中から何かが湧わ  
き出てきた。それを感じると同時に、全身の力が抜けていく。

「お、おいっ！ 何をやっておるのじゃっ！」

爺さんの慌あわてている声が聞こえた気がしたが、そのまま俺の意識は遠のいていった。

ああ、今日はこんなのはっかりだな……。起きたら、自分のアパートの部屋にいたり  
して。

そんなことを思いながら、意識を失ったのだった。



「知らない天井だ……」

ぼんやり目を開けると、丸太で組まれた天井が視界に入り、思わず呟いた。

「夢じゃなかった、つてこと……なんだよな……」

つまり、ここは異世界だ。まだ実感が湧かないが……。

とりあえずベッドで横になったまま、周囲を見回してみる。

どうやら俺は、ログハウス風の簡素な部屋で寝かされていたようだ。

ベッドには、木の板の上に厚手の毛皮の毛布が敷いてあるだけだった。おかげでちょっと背中が痛い。

部屋に一箇所だけある窓は、鎧窓のようにになっていた。その戸の隙間から差し込む光で、今は昼間だとわかる。俺はどのくらい気を失っていたのだろうか？

「クウォンツ！ ウォン！」

「うをつ！ お前、ずつともふもふさせてくれた子だよな？　なんだ、俺が起きるのを待っていたのか？」

ふいにペロンと顔を舐められ驚いて見ると、ベッドの脇にキッチンとお座りした先程の狼がいた。多分さっきまで床に寝そべっていて、見回した時には目に入らなかったのだろう。

なんでこんなに俺に懐いているのか？　と疑問に思うが、むしろ俺は大歓迎なので、起き上がった寝台を下りて狼に抱きつく。全身で、素晴らしく触り心地の好い毛並みを堪能



した。狼の子も嬉しそうに尻尾を振りながらすり寄ってくる。

「お、起きたかの？ ふむ、その子は本当にお前さんのことが気に入ったのじゃな。とりあえず外に出て来てくれないか。お前さんなら見ても大丈夫だろうて」

「あ、はい。今行きます」

「お前さんなら見ても大丈夫」って、何のことだろう？  
 狼の子も俺のあとについてきている。

「お前さんなら見ても大丈夫」って、何のことだろう？

ベッドのあった隣の部屋は広く、中央には素朴な木のテーブルと椅子が置いてあった。壁際には竈が見えるから、台所も兼ねているのだろう。やはりこの部屋にもガラス窓はなく、鎧窓が二箇所あるだけだった。

部屋の様子をちらりと窺ったあと、外に続くと思われる扉を開けた。

すると――

「うっほー！ 壮観だな爺さん！ ここは天国なのか？」

思わず叫んでいた。いや、叫ばずにはいられなかったのだ！

扉の外は広場になっていて、そこには爺さんの他に、たくさんのもふもふたちがいた。

そう、広場に入りきれないほどの、大型や小型のもふもふたちがっ！

俺に付き添って出てきた子狼の親なのか、体長五メートル近くもある、白銀の毛並みの

狼っぽいもふもふ。

ネコ科のような細長い尻尾の、毛の長いもふもふ。

そしてこれこそ九尾の狐か！ という尻尾がいっぱいある狐に似たもふもふ。

ウサギやリスなどの小動物系のもふもふから、羽毛がふさふさの鳥まで、いろいろな種類がいた。

俺の知っている動物たちと似ていても、耳や尻尾の形が違ったり、地球ではありえないくらい大型だったりしたが。

そんな夢のような光景に、俺は迷わず大きな白銀の毛並みへとダイブした。

桃源郷が目の前にあるなら、行くのが男ってなんだ！

「もふもふ！ ふわふわ！ すっごく気持ちいいもふもふだーっ！」

「……お前さん、大丈夫だとは思ったが、迷わずエリルへ飛びつくとは……。自分より遙かに大きな獣ばかりじゃ。普通は命の危険を感じるもんじゃがの？」

「この子たちは、爺さんが言っていた従魔だよな？ なんだか皆優しい顔しているから、全然怖くないよ。嫌がる子は別として、思う存分もふもふさせてもらいます!!」

確かに、従魔たちの巨体や、それに応じた大きな牙と爪が怖くないわけではない。

でも、どの子にも目には知性の光があり、爺さんのことを親しみを込めた眼差しで見ているのだ。

今抱きついている狼型のエリルも、鋭い牙と爪はあるけれど、眼差しは凄く優しくかった。だから安心して、ふかふかな美しい毛並みへとダイブしたのだ！

存分にエリルの毛並みを味わった後は、次の標的を灰色の豹に似た模様のある、ネコ科っぽいもふもふに定めた。寝そべっていても、その顔は俺の腰ほどまでの高さがある。

俺はまず、大きな顔の前にそっと手を差し出してお伺いを立てた。そして、手の匂いを嗅いだ後に下げられた頭を、そっと撫でる。

「おおーう。これはまたビロードのような、めちやくちや滑らかな手触りで……たまらんな！」

「……お前さんには、この子たちのような魔獣を警戒させない何かがあるのかもしれないな。そうでなければ説明がつかんぞ。いくら俺と一緒にいるからといって、皆が大人しく撫でられているとは違う。ふむ、面白い。まあじゃが、今は戻ってこい。さっきは状況の説明ばかりで、碌に挨拶もしておらんかったからの」

そう言われて、まだ俺はお礼さえ言っていなかったことを思い出す。慌てて爺さんの前まで戻り、感謝を込めて頭を下げた。

「お礼が遅くなってすみません。俺を見つけてここまで運んでくれて、ありがとうございます。あのまま転がっていたら、今頃生きていなかったと思います。改めまして、俺は日比野有仁と言います。名前は有仁ですが、呼びづらいので、アリトと呼んでください」

アリトというのは、近所の家に住む幼馴染がつけた、俺の唯一のあだ名だ。子供には、有仁は発音しにくかったからだろう。

「おお、よいよい。望まずに世界の壁を越えてしまったのじゃ、気が動転するのは仕方なからう。改めて俺も名乗ろうかの。オースト・エルグランドじゃ。葉草や薬、植物の研究をしておるよ。よろしくな。こんな辺鄙な土地に住んでいるのは、人に色々言われるのにうんざりしたからじゃな。それにここなら存分に皆を自由にさせてあげられるしの。皆の紹介は後でしてやろう」

いわゆる引きこもりつてわけか。

ここが辺境で魔境の地の一つだと聞いた時、どうして爺さんはそんな危険な場所に住んでいるのかと疑問に思ったが、これだけ多くの魔獣がそばにいれば問題ないってことだろう。

とはいえ、大勢の魔獣を連れてくる爺さんは、恐らく普通ではないのだろうな。この世界の事情はわからないけども。

「ここに爺さんが住んでいてくれて、俺は助かったよ。……俺を見つけた時のことを、詳しく聞いてもいいか？」

「ああ。お前さんを見つけた場所は、ここからもっと森の奥に行つたところだな。葉草を採取していたら、その子が急に駆け出して、追つていった先にお前さんが倒れていたとい

うわけじゃよ。だからお前さんが落ちて来た瞬間は見ておらんし、見つけた時には世界を越えた魔力の歪みのようなものは感じられなかった」

そう言いながら爺さんは、俺の足元に座っている子狼の頭を撫でた。

つまり、俺を見つけたのはまったくの偶然で、なぜあの場所に落ちたかという手掛かりは何もないということか。……まあ落ちた時の状況を思えば、日本に戻る方法などないだろうとは思っているが。

「そうだったのか……。お前が俺を見つけてくれたんだね。ありがとう、おかげで命拾いましたよ」

しゃがんで子狼と目線を合わせてから、お礼を言ってお頭を抱いて撫でる。

「ウォンツ！」

パタパタと嬉しそうに振られる尻尾に、笑みを浮かべた。

「お前さんたちは、多分何かで引かれ合ったんじゃないだろう。そこらへんも、お前さんがこの子たちとすぐに親しくなれたことと関係があるのかもしれないな。恐らくその子も望むじゃろうから、魔法を身につけたら契約を交わしてお前さんの従魔にするといい」

「え？ この子は爺さんの従魔じゃないのか？」

ここにいるもふもふの子たちは、すでにオースト爺さんの従魔か、あるいは将来そうなる予定なのかと思っていた。

「ああ、その子はさっきお前さんが抱きついていたエリルの娘でな。エリルは俺の従魔じゃが、従魔の子には自分で将来を選ばせることにしておるのじゃ。俺と契約するもよし、野に還るもよし、契約せずにここに居るのもよしじゃ。その子はまだ子供だから将来が決まっておらんし、名前もない。魔獣の名は、契約の時に主がつけるのじゃ。だから、お前さんが考えてやるがよい」

「おおっ！ もちろん俺は大歓迎だけど、お前はそれでいいのか？」

「ウォンウォンツ!!!」

抱き込んでいた子狼の頭をいったん放し、目を覗き込んで尋ねる。

けれどすぐに、逆に飛びつかれて顔を舐められ、押し倒されそうになった。

「そうか！ 俺と契約してくれるのか！ これからよろしくな！ じゃあいい名前を考えておかなきゃな！」

「ほっほっほっ。その縁がお前さんを生かしたんじゃないだろうて。だが契約も魔法じゃ。魔力を扱えるようになってから契約をするのだぞ。さっきみたいに本能で魔法を使っても、倒れるだけじゃからな」

「魔法？ さっき俺が気を失ったのは、魔法を使ったのが原因なのか？」

ステータス！ って叫んで倒れたんだよね？

あの時、確かに何かが身体の中から出てきた感じがした。あれが魔力で、ステータス確

認の魔法が発現されそうになったということか？

「そうじゃ。この世界の魔法は、己の望む現象のイメージに魔力を込めることで発現する。あの時お前さんは無意識に、考えていたことに自分の魔力を込めたんじゃないろうて」

じゃあ俺は、『ステータス』の魔法を作ろうとしてたんだな。

うわ、初めての魔法を知らないうちに使ってしまったとは……。しかも失敗して、気絶までしているし。

「自分の魔力を意識せずに動かせば、暴走してしまう危険性があるのじゃ。そうなった場合、大怪我ですめばいいが、運が悪ければ死ぬこともある。だから、アリトが自分自身の魔力をきちんと把握することができるようになるまでは、魔法を使おうとしてはならぬぞ」

暴走すると死ぬ危険性まであるのか！ そんなリスタを冒してまで『ステータス』を把握する必要はないな。

「わかった。肝に銘じておくよ」

「ああ。一つ一つ、無理なくやることじゃよ。まずは、この世界のことを覚えるのが先だの。魔法は幼子と同じく、初歩の初歩から訓練じゃな。ある程度普通に暮らせるようになって、街に出たいと望むなら、その手配をするからの」

「何から何まで、ありがとう。お世話になります。自分にできることはやりますから、ここに置いてください。よろしくお願いします」

俺は居すまいを正してオースト爺さんと向き合い、もう一度深々と頭を下げた。

この世界に望んで落ちたわけではないし、正直に言えば災難だったと思う。

でも、こうやって親切な人に出会えて命を拾った俺は、ある意味では運が良かったのだ。「……ここにいる魔獣は撫でてもいいが、近寄ってきた者だけにしておけ。嫌がることだけはするんじゃないぞ。人を襲うようなことはせぬが、危険がないわけではないからの」

「ああ、わかった！ 少しずつ慣れてもらうようにするよ！」

ここにはもふもふがいっぱいいいて、俺にとっては天国だから、置いてもらえるなら嬉しい限りだ。

街も気にはなるけれど、この世界のことを何も知らない今は、近づくのは怖いと思う。異世界に落ちて、強制的に姿まで変化させられたことにまだ納得してはいない。

けれど、オースト爺さんに助けてもらって、とりあえずここで生きていこうと思えた。今は、ただそれだけでいいだろう。

## 第二話 アーレンティアという世界

この森でオースト爺さんと、爺さんの従魔たちと一緒に暮らし始めて、二月くらい



経った。

今の俺は、魔力の扱いを教わりながら、生活に役立つちよつとしたものを作ったり、爺さんの研究小屋へ顔を出して薬草のことを教わったりしている。

また、こちらの世界の技術や道具をより便利にできないか、爺さんと二人で話し合っただ。また、爺さんは村で買ってきたパンを魔力で覆い、劣化を遅らせている。これを発展させれば、ラノベでお馴染みの入れた物の時間が止まるマジックボックスを作れるかもしれない。そんな話を俺がすると、爺さんは興味津々で乗っってきて、二人で研究しているところだ。

こちらに来てからの二カ月間、俺は様々なことを教わった。

まずこの世界、アーレンティアのことだ。

現在、確認されている大陸は、今俺がいるところと、海を挟んで南に存在するもう一つだけらしい。

南の大陸は比較的狭く、ほぼ山や森に覆われていて、あまり人は住んでいないという。

また、俺がいる大陸の東には小さな島がいくつもあり、小国を形成しているとのことだ。

オースト爺さんの家があるのは、大陸中央付近にあるどこの国にも属さない魔境で『死の森』と呼ばれている森の中だが、同じ大陸にはいくつもの国があつて、王がいたり皇帝がいたり、都市連合になつていたりする。

そこに暮らしているのは、割合の多い順に、人族、獣人、魔人、ドワーフ、エルフ、妖精族や精霊族だ。

ちなみにオースト爺さんはエルフだった。よく見ると、耳が少しだけ長く、先が尖っているんだよな。

エルフは全員細身で美形なのかと聞いたところ、儂を見ると言われた。

爺さんは別に太くはないが、体型は普通の中肉中背だ。顔も凄く美形というわけではない。

ただ、髪を整えて黒の燕尾服でも着せると、品のある貴族に見えるようではある。

オースト爺さんは、エルフでも美形とは限らないと言いたかつたらしいが、まあ、外見なんて個人差があるのは当然だとも言っていたから、女性のエルフに会うのを楽しみにしておこう。

それから、森や山などの人里離れた場所には、普通の獣はもちろん、魔物や魔獣などがいる。

獣が汚染された魔素を取り込むと、『魔物』になるそうだ。それ以外にも、汚染された魔素が集まる場所から自然と生まれることもあるらしい。

魔素の汚染というのは、いわゆる穢れみたくないものだ。

この世界では、死ねば魔素へと還る。ただし、死んだ時に強い恨みや悔恨などを持って生に執着しすぎていると、汚染された魔素となつてその土地を汚してしまふそうだ。

一方、魔獣は穢れに関係なく、魔素の濃い場所から生まれる。

生まれた場所によつて姿も特性も様々で、人を襲う種族もいるが、賢くて知恵がある。だから、人々と従魔契約を結ぶことができ、そうなれば意思疎通も可能なのだ。

ちなみに、この家にいっぱいいるもふもふたちはみんな魔獣である。

オースト爺さんから聞いた限りでは、この世界の技術・文化レベルは、地球でいうヨーロッパの産業革命の頃くらいだろうと感じた。やはり、科学や機械はあまり発展していないようだ。

この世界では、水はどこでも魔法で出せるし、夜の灯りも魔法で確保できる。魔法のおかげでそれほど不自由なく暮らせるから、あまり科学や技術が発展しないのだろう。

お風呂もないが、全身の汚れをキレイにする魔法はあった。心配だったトイレも、その魔法でいつでも清潔だ。おかげで俺も、生活のストレスはあまり感じずに暮らしている。

一日の長さは、体感的には日本と同じくらい。

一週間が六日で、一月が五週で三十日。十二カ月で一年三百六十日だ。一応、暦はあったが、時計はなかった。

けれど、太陽が二つあるという点を除けば、日の出と日の入りは地球と同じくあったので大体の時間経過はわかるし、食事の時間は腹時計で把握できる。

四季はあるものの、太陽が二つある影響なのか、気候は一定ではないらしい。

「爺さん、ご飯ができたぞ」

「おお、今行くぞ。今日は何を作つたんじや？ 楽しみだのう」

家の隣に建つオースト爺さん用の作業小屋へと顔を出し、足元をうろつく「白」とともに家へ戻る。

俺を見つけて懐いてくれた白銀の狼系の魔獣の子に、従魔の契約を結ぶまでの間、とりあえず「白」という仮の呼び名をつけた。

白はフェンリルという種族で、上級魔獣らしい。賢いからこちらの言葉を理解できるし、ちゃんと反応も示してくれる。契約を結べば、念話によつて直接会話することが可能になるそうだから、とても楽しみだ。

「この間爺さんが採ってきたハーブが乾燥したから、今日はそのハーブを利かせた鳥肉のステーキと、スープとパンだ。パンもちゃんと温めてあるぞ」

「おお、美味そうじゃ」

食卓に並んだ料理を見て、オースト爺さんはゴクリと唾を呑んだ。

「爺さん、ちゃんと手を洗ったか？」

待ちきれないとばかりに、そそくさとテーブルについた爺さんに苦笑し、向かい側に座って尋ねる。

「ああ、浄化の魔法をかけたぞ。では食べよう。いただきます、じゃ」

「いただきます」

『いただきます』は食材への感謝の気持ち伝える挨拶だ、と教えたら、爺さんも言うようになった。

浄化魔法は、汚れを落としたり、トイレの汚物を分解したりする魔法だ。

この世界には基本的に共通の魔法などないが、浄化魔法や種火の魔法をはじめとした『生活魔法』と呼ばれているものには、名称がついている。生活魔法は日常生活に必要なことを発現させる魔法であるため、誰が使っても魔法の効果は大体同じなのだそう。ただその中で、浄化魔法だけは用途の幅が広い。お風呂や洗濯の代わり、トイレの時にも使う。

もちろん、汚れを落とすといっても、イメージ次第で発現する効果は異なる。日本にあった漂白剤のことを爺さんに説明して、色素を分解するイメージで浄化を掛けてもらおうと、洋服が輝くほど白くなった。いつもの浄化では目立つ汚れが落ちるだけだったから、その浄化との違いを見て、やっぱり魔法はイメージが重要だと実感したものだ。

「おうおう。今日も美味しいのう。アルトが来てから食事が楽しみになったわい」

「爺さんは適当に焼いたり煮たりして、味付けは塩を振るだけなものな」

この家で爺さんが初めて出してくれたものは、ハーブティーだった。恐る恐る口にしたら、香りは少し独特だったけれど、普通に美味しかったので、味覚は同じだと安心したのだ。

ただ、その日の夕食として振る舞われた爺さんの料理は、適当に塩で味付けして焼いただけの焦げた肉と硬いパンで、ちよつと味が物足りなかったんだよな。

だから、それ以降は俺が料理をしている。

使う食材は、ほぼ『死の森』で採れる肉と野菜代わりの野草で、主食は爺さんが近くの村でまとめて買ったパンだ。

まあ、それはいい。問題なのは、調味料だ。

この家に元々あった調味料は、塩と黒糖のようなもの、それに胡椒に似た香辛料だけだった。

街へ行けばもう少し調味料の種類はあるそうだが、基本は塩と砂糖と香草だけらしい。

そこで俺は、爺さんに森に生えている様々な種類の野草を採ってきてもらうことにした。その野草を一つ一つ、匂いと味を確かめ、調味料として使える物を選別しているのだ。

「この世界では、基本は焼いて煮るだけじゃぞ。お前さんみたいに、蒸したり浸け込んだりという調理法は聞いたこともないわい。それに野草を組み合わせて味付けに使うなんて、

普通はやらんぞ」

「ただの塩味より、よっぽど美味いだろ。今度森で果物を見つけたら、また違う味付けの料理を作るよ」

祖母に一人で何でもできるようにと仕込まれたから、自炊じすいをしていたし、料理は一通り作れる。

台所には竈の他にコンロの魔法具があり、魔物から稀に採れる魔力結晶けつしょうを燃料にしている、火力の調節もできた。だから、魔法を使えない俺が料理をするのにも何の問題もない。調理法が変わっているとは言うものの、爺さんも俺の作る料理を気に入ってくれたようだ。

「ほっほっほっ。楽しみじゃわい。森へ行く時は、ちゃんと皆を連れていくのじゃぞ」

「ああ、ありがとう。まあ、森といってもこの家の近くまでだしな。まだ魔力を上手うまく扱えないし、魔法も使えないから」

爺さんの従魔のもふもふたちとも、仲良くしている。

俺たちが食べている肉は、全て彼らが仕留しりぞめてきた魔物や魔獣のものだ。

人を襲うような種類の魔物や魔獣を、食べる分だけ毎日狩かってくる。

その獲物えものをすぐに血抜きして解体し、食べられる内臓ないぞうは生なまで、肉は少し炙あぶつてもふもふたちに出してみたら、皆、大喜びで食べていた。

解体はオースト爺さんに教わりながらやったのだが、魔物や魔獣はかなり大型だったため、結局一人では解体できなかった。そこらへんは、従魔の皆に魔法を使って協力してもらっている。

おかげですっかり仲良くなり、今ではもふもふし放題だ！

もちろん、料理ばかりでなく、ちゃんと魔法を使うための訓練も毎日している。

自分の持つ魔力の感知は、すぐにできた。最初にステータスと叫んだ時の感覚が残っていて、それを手がかりにしたのだ。

今は、子供が最初に取り組む訓練法を爺さんから教えてもらい、実践じっせんしている。

座って目を閉じ、自分の体内の魔力の流れを完全に把握じやくわくし、循環じゆんかんさせるという方法だ。

地味な訓練だが、成果は出ている。たとえば、竈で調理する時は、魔法で火をつけて火加減を操作することもできるようになった。

燃えやすい葉を用意し、体内の魔力を操作して集め、人差し指から火花を散ちらすイメージで放出する。一度火がつけば、操作は容易たやすかった。強火は空気を送り込んで火を大きくするイメージで魔法を使い、弱火は逆に空気が薄くなるイメージだ。

難しいのは、何もない状態から魔力で現象を発現すること。

たとえば、手のひらに火を出すとなると、自分の魔力を操作して空気中の魔素かんじゆに干渉かんじやうし、火を出すイメージを伝えて変換する、という過程をたどらねばならない。

その時に火の大きさ、温度、形状など、全て確実にイメージ通りのものに変換する必要があり、これが非常に難しい。魔法の操作に慣れるためにも、家事をやりながら訓練するという今の生活は意外と効率がいい気がしている。

とりあえず今は魔法操作を完璧かんぺきにして、白と契約をする！ のが目標だ。

### 第三話 魔物がいるということ

俺の目の前には、粗目あらめの布と鍋なべ、そして木の実の山がある。

木の実は、オリブを二回り大きくしたような見た目だ。爺さんが採ってきた物の中にあったのを見つけて「これは」と思い、追加で大量に採ってきてもらった。

今日はこの木の実の油を搾しぼって、トンカツを作りたいと思います！ 豚肉じゃなくて、豚肉と似た味の魔物肉だけどな！

実が大きすぎて俺の力だけで搾るのは難しいので、もふもふの皆さんに協力してもらい、俺は魔法で補助することにした。

この森で採れる食材は美味しい。最初は魔物や魔獣の肉を食べるのは少し抵抗があった

が、猪肉とか鹿肉のようなものだと思って口にすると、あまりの美味しさに驚いた。肉自体の味が濃く、日本で食べた国産の牛肉よりも美味しいのだ。

だが、近くに川も海もないから、魚は手に入らない。

だから、一日三回のおかずは肉、肉、肉。森で採れる野草いもと芋いももあるとはいえ、いくら美味しくてもさすがに飽あきる。

そんな状況では、揚げ物が食べたいと思っても、動物性油で肉を揚げた物を食べる気になれなかった。そのため、植物油を作ろうと準備していたのだ。植物油があれば、調味料にも使うことができるしな。

「よし、やるぞー！」

まず、大きな粗目の布を広げ、次に中央に木の実を並べる。ガッツリいっぱい置いたら、布で木の実をくるんで準備は完了だ。

「エリル、この布の端はをしっかりと咬かんでくれ。歯を魔力で強化しておいてな」

自分の魔力を身体からだに纏まとい、周囲の魔素を自分の魔力へ変換しながら肉体を強化する、身体強化魔法だ。

これは実は凄く難しい。少しでも制御せいぎよを失えば、体内の魔力が暴発ぼうはつするのだ。もちろん、魔獣である皆は、本能で完全に制御せいぎよすることができるのだが。

「もう片方は、と。こうぐるぐる」と絞しぼって……。よし、こっちはラルフ、お願